

書表現に関する学生の意識の広がり

— 「書道研究 I」 の実践を通して —

林 朝 子*

「書道研究 I」の授業実践報告である。授業で行った「見る」(鑑賞、古典の比較)、「書く」(臨書)、「創作」の活動を通して、学生の書表現への意識を広げることを目指した。各活動への学生の発言やレポート内容で、学生の書表現の見方・書き方に対して具体的な観点が触れられており、学生の書表現への意識の深まりと広がりを確認でき、本授業実践の効果が感じられた。また、書表現への理解が深まることで、書写書道教育の在り方や指導の工夫についても意識が向けられていることがわかった。

キーワード：書表現、鑑賞、臨書、創作

1. はじめに

本稿では、筆者が担当した平成 26 年度前期開講「書道研究 I」を通しての、学生の書表現に関する意識の広がりを見ることを行う。これまでも実技科目だけでなく、「書論・鑑賞」「書道史」といった理論関連科目も開講をしている。しかし、このような科目を全て履修する学生は実際には非常に少ない。書道というものは、本来、実技面・理論面の双方によって支えられているものであり、その両側面を取り上げたのが「書道研究 I」である。実技面・理論面から書道に向き合うことで、学生の書表現に関する意識がどのように変化し、広がったのかを、学生のコメントを基に、明らかにしていきたい。

「書道研究 I」と書写教育の関係についても触れておきたい。小学校中学校においては国語科書写において、「硬筆による書写の能力の基礎を養う」ように毛筆を取り入れている。書写は国語科の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に位置付けられており、「言語文化」には以下のものが含まれるとされている。

言語文化とは、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値を持つ言語そのもの、つまり文化としての言語、また、それらを実際の生活の中で使用することによって形成されてきた多様な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを幅広く指している。¹⁾

このような「言語文化」の捉え方から、毛筆を単に硬筆の書写能力の基礎を養うためだけのものではなく、古

代から現代まで継承される、一つの言語芸術や芸能としての毛筆表現として捉え、高校芸能科書道へのつながりも視野に入れ、書写を見直す必要性が感じられる。

また、中学校書写では、楷書だけでなく行書の基礎的な書き方も導入しており、「我が国の伝統的な文字文化やこれからの社会に役立つ様々な文字文化に関する認識及びそれらに親しむ態度の育成」²⁾も掲げられている。

このような小中学校における書写の位置付けを鑑み、書表現を実技面・理論面の双方から見直すことは、書写の指導内容の広がりと共に、書写から書道へのつながりをも視野に入れた書写教育の実践にもつながると考えられる。本授業では、書写と書道のつながりも視野に入れ、授業を計画し、実践を行った。

2. 「書道研究 I」 授業概要

「書道研究 I」は、2 年生以上の学生を対象に開講されている科目である。授業では、実技面と理論面を並行して取り上げた。

実施時期：平成 26 年度前期

履修学生：20 名 (4 年生 5 名、3 年生 13 名、2 年生 2 名)

使用教材：

『書の古典と理論』(全国大学書道学会編) 一部

『梧竹堂書話釈解』(青柳堂) 一部

『空海・風信帖』、『最澄・久隔帖』、『玉羲之・集字聖教序』(二玄社)

授業内容：大きく【理論面】と【技能面】の 2 つに分かれる。

【理論面】

1) 書論の読解 (『梧竹堂書話釈解』)

2) 鑑賞の観点 (第 65 回みえ県展鑑賞レポート)

* 三重大学教育学部

3) 古典の書表現比較 (グループ発表)

- ・『風信帖』3通の比較
- ・『風信帖』と『久隔帖』の比較
- ・『風信帖』と『集字聖教序』の比較

【技能面】

- 1) 『風信帖』臨書
- 2) 『風信帖』の表現を活かした創作 (作品の発表と鑑賞)

さらに、最終課題として、授業を通して書道や書表現について考えたことをレポートとして提出させた。

3. 学生の書表現に関する意識について

ここでは、授業で取り上げた各内容の詳細と共に、学生のコメントから書表現に関してどのような意識を持っているのかを探っていききたい。

3-1. 【理論面】

3-1-1. 書論の読解 (『梧竹堂書話釈解』) について

本授業の導入として、第1-2回の授業で『梧竹堂書話釈解』(以下、『梧竹』)の一部を使用し、学生と読解を行った。これは明治の書家である中林梧竹の書論をまとめたものである。梧竹自身、古典の臨書を深く実践し、独創的な書風を確立した書家であり、「古典学習と創意の大切さ」³⁾を強く説いている。使用したのは、第1章(書とは何かについて)、第20章(手本とすべき古典について)、第30章(日本の書について)である。本授業を通して『風信帖』の臨書を行ったが、多くの古典における『風信帖』の位置付けとその価値を確認するため、『梧竹』の中で述べられている、手本とする場合の真蹟の適切さと空海の書が晋唐の時代に比較しても劣るものではないとしている点を取り上げた。

ただ、今回は『梧竹』の一部を抜き出したに過ぎず、中林梧竹が言わんとした内容を学生が十分理解しているとはいえないであろう。

3-1-2. 鑑賞の観点 (第65回みえ県展鑑賞レポート) について

鑑賞レポート課題を提示する際、「書道展を見に行ったことがあるか」との問いに、「ある」と回答したのは1名であり、その他は「ない」であった。「ある」と回答した学生も、「人に誘われたから」という理由であり、自ら進んで見に行ったという状況ではなかった。

「なぜ見に行かないのか」という問いについての回答は、「書道展がいつどこで行われているのかわからない」という情報入手の問題を除くと、「見ても何がいいかわからない」「どのような観点で見ているのかわからない」というものだった。以上のことから、学生にとって書道の鑑賞は「よくわからないもの」である現状が窺われた。

書を見るときはということなのか、という点を感じ取ってもらう活動として、書道展の鑑賞レポート作成をおこなった。5月17日~6月1日に、三重県総合文化センターで開催されていたみえ県展に各自が赴き、書部門の展示作品より直観的鑑賞で1点選び、その作品について分析的鑑賞を行い、レポートを作成するという課題である。

分析的鑑賞では、直観的鑑賞で感じた美をもたらす原理や技法について探ることを目指した。その際のポイントについては、事前の授業において、『風信帖』を例に挙げながら説明を行った。主なポイントとして、以下の点を取り上げた。

- ・墨の潤滑
- ・文字の大小と結構
- ・運筆の遅速と筆圧の強弱 (抑揚)
- ・文字の疎密と作品全体の疎密
- ・余白の美
- ・落款の書き方

これらの点を中心に、分析的鑑賞を行った。実際の作品を模写し、詳細な分析に取り組む姿勢が見られた。実際のレポートから分析例を挙げる。

- ◎作品全体を模写し、文字の大小や墨の潤滑、全体の疎密等についてコメントや図を加筆したもの (図1)
- ◎「全体的に墨色は濃く、一文字一文字に力強さがあるながらも、どこかさっぱりとしている印象」という直観的鑑賞に対し、文字の結構と文字の疎密について、いくつかの文字を模写し、分析的鑑賞を行ったもの
- ・全体的に、一文一文字の中心が揃っている (図2)
- ・しんにょうの最後の払いが払っておらず、とめてある。一度、筆を置き直したかのようにしっかりととめてある。→力強さが表れている (図3)。
- ・一文字一文字が独立して書かれていて、虚画は見られないが、つながろうとしていることが分かる終筆となっている (図4)。
- ・主画の強調と見られるものが「見」という字の5画目にあった (図5)。
- ・しんにょうと傍の間には広い空間がある (図6)

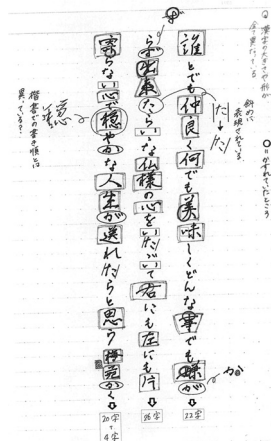


図1

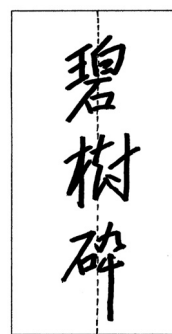


図2 中心

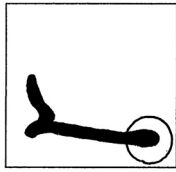


図3 しんによる



図4 筆脈



図5 主画

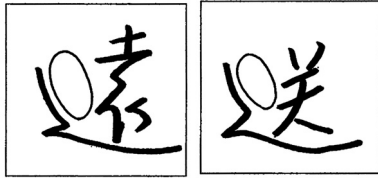


図6 文字の疎密

また、鑑賞を通したまとめのコメントとしては、次のようなものが見られた。

- 作品を見て感じて終わりというところを、書の表現の仕方から分析的に見ていくことで、自分のインスピレーションが生じた要因を考えられた。じっくり見ることで、初見では気付かなかった筆の流れ、余白の使い方、筆圧の強弱を発見した。その発見がどんどん増えていったのが面白かった。／書道展を見て、改めて「書」の表現の多様性を実感した。今回の経験を基に、自分自身の創作作品に活かしていきたい。
- 様々な書を見て、筆と紙を使うということは同じであるのに、こんなにも表現の方法がたくさんあり、書く人によってその字の表現の仕方や字間の明け方、配置の方法などが異なるのだということがわかった。一つも同じものはない作品を見るのは楽しかった。／同じ字や文章を異なった人が書けば、表現の仕方の違いでどのように作品が変わってくるのかも見てみたいと思った。
- 作品を直観的に見るだけでなく、分析的に鑑賞することで、その作品の流れや様々な工夫がされている点などが見えてきて、書道がますます面白くなった。／実際に創作する場合に、字の流れや墨の潤滑などはどのように考えるのかも調べて、自分のものにしていくといいと思う。／紙の色や質、形の違いでも直観的な印象がだいぶ違い、紙の選択についても気になった。
- この作品が出来上がるまでにどのくらいの時間を要しているのか、どのような心意気で書いているのかとういことも気になった。
- 書道を見た後に写真や洋画も見たのだが、その後もう一度書のほうに戻ってきて見ると、書というのは紙と墨、白と黒だけで表現されており、たったそれだけであるのにも関わらず、たくさんのことを表現しているものだと感じ感動した。

まとめのコメントでは、作品に対して、直観的に感じ

た印象が作品のどの表現に起因するのかが明らかになることで、書を見ることの楽しさや面白さを感じているものがあつた。また、書という表現の広がりや深さに気付いたり、その表現方法を自身の創作にも生かしたいという発展的なコメントにも結びつけられていた。

3-1-3. 古典の書表現比較

先述したように、『風信帖』3通の比較、『風信帖』と『久隔帖』の比較、『風信帖』と『集字聖教序』の比較をグループ発表の形式で行った（以下では、『風信帖』を『風』、『久隔帖』を『久』、『集字聖教序』を『集』と略す場合がある）。

まず、『風』3通の比較についてであるが、『風』は書かれた時期の異なる第1通から第3通がまとめられたものであるため、書表現に共通点とそれぞれの特徴が見て取れる。これらの点を中心に比較を行った。

『風』と『久』の比較は、『久』は空海と同時期に入唐した最澄の書簡であることで取り上げた。空海と最澄は、唐において、同じ古典に触れ、学び、それらの書法を吸収したと考えられ、両者の共通点と相違点に気付くことを目的とした。

『風』と『集』の比較についても取り上げた。空海が王羲之の書法を学び取っていることは、空海の書から多くを窺うことができる。『風』では王羲之の書法だけではなく、それを基本としながらそこに日本的な情緒を加味した、和様の萌芽的なものが感じ取れる。その点から、この2つの比較も行うこととした。

以下で、比較した結果と分析の発表内容の一部を取り上げる。

◎『風信帖』3通の比較

- 3通全体を比較—形の上から、線の上から、文字の並べ方

- 3通に共通する文字を比較

「具」：草書が使われているが、第3通は極端な簡略化がされている。(図7)

「以」：終筆の違いがよく分かる。第1通、第2通はしっかりと筆をおき直したように止められているのに対して、第3通はすっと力を抜いているように見える。また、第2通は角張った折れになっているのが分かる。(図8)

「不」：虚画の線の太さ、丸み、擦れに注目できる。第1通が漢字であるのに対し、第2通と第3通は書き崩されてひらがなに近くなっている。第1通は全ての画が太い線で、第2通は実画と虚画で線の太さが変えられている。また、第3通は虚画の擦れが特徴的である。(図9)

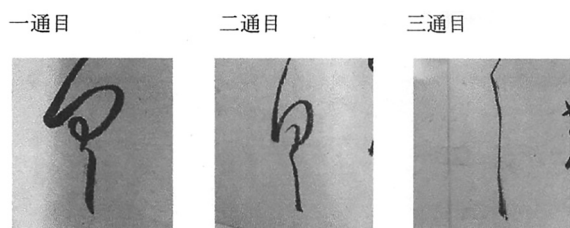


図7「具」

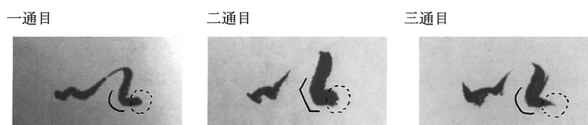


図8「以」

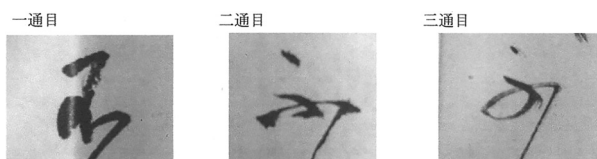


図9「不」

・3通に共通する文字比較からの考察

共通する文字を、簡略化・終筆・丸み・擦れ・線の太さの観点から比較したが、どの点においても文字を書くスピードの違いがそれぞれに表れているのではない。文字を書くスピードが変化した理由について、書簡の内容から推測した。(以下、略)

『風信帖』の3通の比較については、同じ空海の手書であっても、共通点だけでなく、同じ字に対しても表現が異なることを多く取り上げていた。書簡の内容とも照らし合わせ、その書簡を記した際の心情との関係にまで踏み込んで考察を行っているグループも見られた。

◎『風信帖』と『久隔帖』の比較

・両者の全体の比較

直観的鑑賞で見た場合、『久』のほうが見やすい印象を受けた。

その理由を、線の太さ・墨量・字の崩れ・連綿・主画の強調・一画目の形・空間の点から比較した。(以下、略)

・両者に共通する文字を比較

「情」：『久』の方では、「月」の部分の部分が極端に崩れている。一方、『風』は、りっしんべんの段階で既に崩れており、「青」の部分においては、もはやかなり崩した草書の表現がなされている。このような箇所から、『風』は字が泳いでいるような印象を受ける。(図10)

「所」：両者共、草書体を使用しているが、崩し方が異なり、同じ字を表しているとは思えない。『久』のほうは、線が太くはっきり書かれているが、

『風』のほうは、かすれが目立つ。しかし、滲んでいるように見えるため、特に上の部分は墨をたくさんつけたのではないだろうかということも想像できる。(図11)

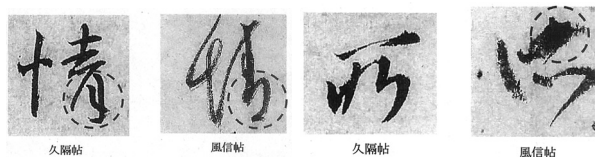


図10「情」

図11「所」

・空海と最澄の特徴

最澄の字は、墨の潤滑などがなく、単純な書きぶりである。最澄の字の特徴であると考えられる。空海の技巧的な字に対して、最澄は端正な字である。両者の墨量の違いについては、空海は字を速く書くために墨を何度もつけ直すことはせず、一度でぎりぎりまで書けるようにした結果、『風』に見られるようなものになったのだと考えた。

『風信帖』と『久隔帖』の比較については、違いに焦点を当てる事が多く、共通点に触れるものは少なかった。両者は一見すると、最澄の縦長の字形や右上がりの書き方が目立ち、その点に意識が集中してしまい、両者に共通している王羲之書法の点への気づきはなかったようである。

◎『風信帖』と『集字聖教序』の比較

・両者に共通する文字を比較(下線は共通部分)

「書」：『風』は全体的に右上がり、「日」が中心より右に配置。前の字の「尊」が「書」と同様、右上がり、「寸」が中心より右に位置するからだと考えられる。このように配置することで、バランスを整える効果があるのではないかと見える。また、ほとんど簡略化されておらず、終筆がしっかり止められており、線の強弱も見られる。『集』のa)は、『風』と同じく右上がり。「日」はほぼ中心である。b)は「日」の部分以外はほとんど簡略化されておらず、一点一画の起筆、終筆ともにしっかりと止められており、楷書のようにになっている。c)は楷書に近い形になっている。また、右上がりにもなっている。(図12)

「自」：『風』は、外側の線は極端に太い線で力強く止められ、内側の線を点のように少し小さめに書いている。字の終わりにも注目すると、二画目のハネと平行に重ねるように止めている。さらに全体に丸み(向勢)が見られる。一画一画の起筆が露鋒で書かれておらず、藏鋒が使われている。この藏鋒が全体的な丸みを表現している

のではないか。『集』の a) は露鋒で書かれているので、均整である。また、三画目のハネが鋭い。b) は、一画一画に隙間が空いており、文字自体は小さいが空間に余裕がある字になっている。一定の強さで書かれ、終筆もしっかりと止められている。c) は、線が細く、二画目の折れの後だけ少し太く感じる。また、字の終わりは、二画目のハネの対角に重なるように止めている。(図 13)

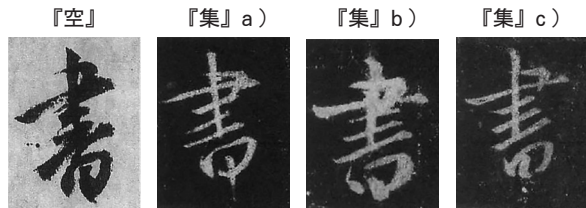


図 12 「書」

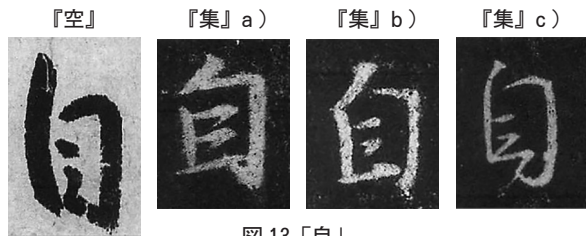


図 13 「自」

『集字聖教序』は王羲之の書から 1,904 字を懐仁が集字し、まとめたものである。主に『蘭亭序』からのもので占められているが、全体的な統一感に欠ける部分がある。文字が多く、文字と文字のつながりが感じにくいという集字の特徴から、全体の統一感が薄いため、『空』と『集』の全体を大きく比較することは困難であり、共通する文字を取り上げ、比較することを行っている。また、『集』は拓本であるため、拓本の特徴である白黒反転文字を見慣れているかどうか、比較分析の深まりに大きく影響したと考えられる。

例えば、「書」という一文字に関しては、「右上がり」「終筆の強さ」という共通点を挙げているが、「自」の文字については、共通点は述べられていない。しかし、実際には、『空』の「自」の向勢の取り方、左上の空白や 5-6 画目のつながりと右の空白等、は『集』c)「自」の影響を大きく受けていることが見て取れる。『集』の拓本文字から、実際の字形や線質までイメージできる段階を経て、『空』と『集』の比較に進めば、より深く分析ができたと思われる。

3-2. 【技能面】

3-2-1. 『風信帖』の臨書

まず、第 2 回目から第 5 回目授業において、『風信帖』の臨書を半紙に 4~6 文字で行った。第 2 回から第 5 回

までは、『風』の特徴的な部分を取り上げ、臨書を行った。第 6 回から第 11 回は、第 1 通から臨書を行った。全臨を行う予定であったが、第 2 通、第 3 通については、一部のみ臨書となった。『風』については、書道の古典臨書として代表的なものであり、高校で書道を芸術科目として選択している学生であれば、少なくとも『風』の一部分は書いているはずである。しかし、今回の第 6 回目以降は、真蹟のコピーを配布し、そこから各自が字形や運筆を探りながら臨書を行ったため、戸惑う学生も見られた。『風』の書に近づくために、運筆の試行錯誤をする中で、その書が書かれた過程に気づくことができるようになった。書は表現された結果であるが、その結果を見て、起筆送筆収筆の流れ、運筆の遅速などに意識を向けながら、表現の過程を追究する姿勢が窺えた。

3-2-2. 『風信帖』の表現を活かした創作

第 12 回から第 14 回は、『風』の表現を活かした創作活動に充てた。今回の創作では、基盤となる古典を『風』とし、その表現方法を活かすことを目指した。作品では、自分が好きな言葉書いてよいと伝えたが、言葉の中に一文字でも『風』の中で使用されている漢字が使われているものを選ぶ傾向にあった。授業で『風』の臨書を行い、運筆等の確認はその都度行ってきてはいるが、全く異なる漢字に『風』の表現方法を反映させて創作を行うことはこの段階では難しいと感じる学生も見受けられた。

大きさは半紙サイズで、半紙の縦横の使用については自由とした。文字数については、2 文字以上とした。創作する上で『風』の表現を活かすと共に、書道展の鑑賞時に感じたことも活かすように促した。一つの作品として創作する場合、一文字一文字への配慮だけではなく、全体の余白、字間と行間、墨の潤滑等にも工夫をするよう伝えた。墨については、固形墨を擦り、様々な墨色で書くことも行わせた。同じ言葉であっても、墨の濃淡によって、作品から受ける印象の違いを確かめるようにした。また、墨の潤滑についても、どの部分で擦れを出すか作品に広がりが出るのかを確認しながら、潤滑の場所を考えることも行った。落款については、辞典を使用し、各自の名前の崩し方を確認しておくように指示した。印は、全員共通で「三翠書」という印(白文と朱文)を使用した。

最終回の第 15 回には、全員の作品を掲示し、作品解説のプリント配布とともに、一人ずつ口頭で解説を加えた。

では、以下では、作品解説の一部を紹介する。

◎作品「信念」

言葉：今年で卒業し、来年から教育現場に出ていく自分が、教師としてふさわしい人物になることができるよう日々成長するという「信念」の下、学校生活を送っていく決意を書き表現した。

工夫：『風』の漢字の一部一部を組み合わせて書いた。／全てが堅い印象になってしまわないように、『風』の逆筆を取り入れた。／連綿を取り入れることで、自分の気持ちに揺らぎがないこと、かつ、一つ一つの字に一体感を持たせる効果を期待した。墨量は、「信念」という漢字の意味から全体的に一定の量で書くようにしたが、最後の「心」の部分を擦れさせたことで、書ききった感を表現した。

感想：草稿の段階で、どこに『風』の特徴を入れれば自分が思うような書を表現することができるか、また、どの部分を工夫することで創作といえるかを考える時間が思ったよりかかった。しかし、書いていくにつれて、ここを工夫したら自分が求めている表現に近づけることができる、次はこうしてみよう、などと数をこなすうちに「自分なりの書」を自然と考えることができるようになっていた。

◎作品「前々進」

言葉：もっと前を向いていたいという気持ちを込め、この言葉にした。「前進」ではなく、オリジナルな雰囲気を出したいと思い、「前々進」とした。

工夫：『風』から抜き出そうと思ったが、「進」はなかったため、「惟」の左部分としんにょうを合わせて表現した。

感想：今までやってきた書写書道は字の配置やどのように表現するか等は自分で決めずにお手本に沿って書くというものだった。そのため、今回自分が書く字も配置も表現の仕方も全て自分で決めるというのが初めてで、どのようにしたらいいのかわからなかったが、考える過程はとても楽しかった。どのような配置で書けば見た目がすっきり見えるのか、この字数・字であればこのように表現したらよさそうだとすることを常に意識しながら書くことができた。また、擦れ部分の表現についても、故意にかすれさせて文字を書くという経験がなかったため、擦れの表現方法についても考えることができた。

◎作品「人思空仰」(図14)

言葉：大切な家族のことを思って、この言葉を選んだ。
工夫：何度も何度も試し書きをし、配置も何通りも考え、何枚も何枚も書いた。4文字でアシンメトリーの配置にしたかったのだから、バランスが悪くなってしまった。文字にも大切な家族の優しさや温厚さを、少しぼんやりした雰囲気を表したかったので、文字は丸みのある感じにした。



図14「人思空仰」(学生の作品)

書く言葉を自由にしたことで、各学生がそれぞれの思いを込めた言葉を書くことができた。単に文字が並んだものを書くのではなく、「意味のある言葉」を書くことで、それを作品として作り上げたいという気持ちが強まったと思われる。そして、そのための工夫をし、何枚も書くことの繰り返しを通して、表現の方法とその作品から受ける印象についての考えを深めていった様子を感じられる。工夫の観点はそれぞれ異なるが、『空』を表現方法の基本に位置づけたことで、全員の作品を鑑賞し合う際にも、表現方法に関して共通理解することができ、鑑賞内容を深化させることができた。

4. 学生が考える書表現について

最終課題として、授業を通して書道や書表現について考えたことをレポートとして提出させた。それらのコメントを総合すると、書表現を図15のように学生自身が考えていることがわかった。「見る」、「書く」、「創作」という3点によって支えられている書表現を、授業において、それぞれ「展覧会やお互いの作品鑑賞と古典の比較」「『風信帖』臨書」「基礎表現に基づく創作と個性の出現」という形で実際に体験することで、書表現が何によって支えられているのかを具体的な観点で捉えられ、また、書表現の広がりや深さを感じ取ることにつながっている。また、書表現を感じ取ることで、日常生活での文字や書写教育への応用などにも関心や思考の広がりを見せていることもわかった。

4. 学生が考える書表現について

では、学生コメントの一部を見ていく。

では、学生コメントの一部を見ていく。

◎「見る」(展覧会やお互いの作品鑑賞と古典の比較)

- 様々な人が書く自由な表現を見て、こんな書き方をしていいのだと知った。
- 20人の作品鑑賞会では、20人全員のそれぞれの思いが伝わり、改めて書く人によって個性が出ると感じた。「望」や「天」を書いた人は多かったが、同じ字でも異なった印象をうけた。
- 古典の比較では、同じ作者でも書き方が異なることや作者によってそれぞれ特徴がある。
- 様々な人の書を見ていく中で、どのような気持ちでその書を書いたのかを想像するのが楽しかった。

◎「書く」(『風信帖』臨書)

- 臨書を進めるうちに、筆の運び方がだんだんわかってきて、少しずつ読めるようになった。

- 書の表現の仕方は、柔らかく書いたり、一部を強調して書いたりするなど、多岐に渡ると気づいた。
- 手を動かすことによって、眺めているだけでは分からない部分にも気づける。特に、筆運びや擦れは、書いてみないと分からない。書いている内に、自然と手本と同じような擦れが生まれる。そのとき初めてどんな筆運びをしているのかが分かる。

◎「創作」（基礎表現に基づく創作と個性の出現）

- 自分の表現したいことをどう書けば、見る人に伝わるかを一生懸命考えた。
- 『風信帖』を使った創作に最も楽しさを感じた。
- 自分の名前の書き方にもたくさんの種類があり、書く字の表現と名前のバランスや雰囲気によって、書全体が変わると気づいた。
- 臨書を経験することで、「この書き方を自分の書にも取り入れてみよう」「この書き方を自分なりにアレンジしてみよう」など創作のイメージを膨らませることができる。書を表現するには、多くの古典に触れ、臨書の回数を重ねることが重要だ。

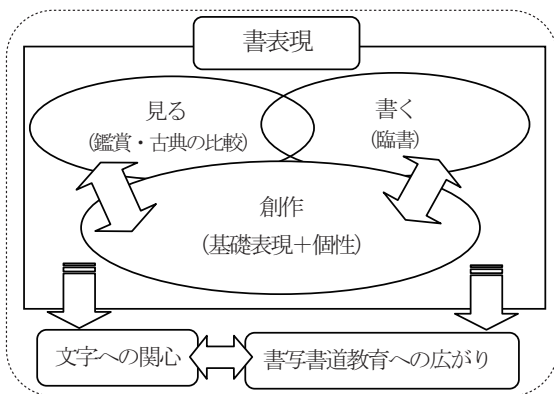


図 15 書表現とその広がり

◎日常生活での文字への関心

- 辞書の背表紙を見ながら、いつの間にか、辞書名の書風にも、『風信帖』っぽかったり、王羲之に似ているものがあるな等、いつの間にか考えていることがある。

◎書写書道教育への応用

- 書写や書道は字を上手く書くのが一番の目的ではなくて、字体をゆっくりじっくり見つめることで、その字がどのような形で、どのようなバランスで出来上がっているのかを考えながら書くことなのではないかと考えるようになった。
- 子どもたちに書道のことをより楽しく学んでもらうた

めには、まず「字を書くこと」自体に楽しさを見出すことが大切だと感じる。例えば、創作活動として、字の綺麗さを求めるのではなく、何か出来事や物事を字によって表現してみたり、字から伝わるものを感じられるような授業ができないか、考えていきたい。

5. まとめ

「書道研究 I」での実践内容を通して、学生の書表現への意識の変化や広がりが見られた。書写書道の好き嫌いは、書塾経験の有無に大きく影響する⁴⁾。しかし、本授業では、そのような経験の有無に関係なく、書とはどのような表現なのかという根本的な部分を感じ取ることを目標に、それぞれの活動を行ってきた。その結果として、「見る」「書く」「創作」によって支えられる書表現について、細かな観点を踏まえて考え、書表現に対する意識も広がったと言える。書で表現することに対し、「楽しい」「面白い」というコメントも多く見られたのも、書表現の見方や書き方が具体的に理解できたことが大きく影響しているであろう。

しかし、本授業では多くの活動を入れたことで、古典の比較等については十分に掘り下げることができなかった部分が多い。書表現への意識の「深まり」を更に追求していくためにも、今後の授業内容についての検討も行っていきたい。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社
- 2) 同上
- 3) 書学書道史学会編 (2005) 『日本・中国・朝鮮 書道史年表事典』萱原書房
- 4) 林朝子 (2011) 「小学校における“書写”のあり方—“書写”に対する学生の意識調査から—」『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要第 31 号』

参考文献

- 天石東村編 (2009) 『書道技法講座 10 行書 風信帖・灌頂記 (改訂版)』、二玄社
- 林朝子 (2014) 「学生の「毛筆力」への気づきに関する一考察—学生と幼稚園児の毛筆活動交流を通して—」『書写書道教育研究第 28 号』